

三浦俊介『神話文学の展開——貴船神話研究序説——』

山下久夫

実際問題としては制作者を一人と決めず、『貴船の本地』の成立にいくつかの段階を想定しなければならないだろう。例えば、カモ一族の管理のもと忍従を余儀なくされていた舌氏一派が貴船神社興隆のために社内極秘情報をすくいあげて「貴船縁起」なる呪的テキストを企図する、それを洛北周辺の法師陰陽師、唱門師たちが年中行事由来譚を加えて「貴船の神と（本地仏と）鬼の物語」に整えていく、さらに洛中の物語作者が最終的に草紙としての「貴船の物語」を作成するなどというプロセスが想定できる。とは言え、神社付属の下層民であったはずの舌氏にどれほどの教養があったのか、発信力があったのか、その他、各段落での実態すべてについても大いに疑問の残るところである。

本書第三部では『貴船の本地』を注釈的に研究した。鬼家族の名前の由来や「鬼を食う」五節供、貴船神社奥端の祭神の比定など説き明かした問題もあった。しかし、貴船神社と鞍馬寺との関係、説経『小栗』にも通ずる中将の形象化、ドラマ全体の構成や表現、異郷訪問や「鬼国」描写の比較研究、論じ残した年中行事の実態、伝本ごとの丁寧な分析など、解決すべき点は数多く残されている。

中世神話『貴船の本地』の研究はまだ始まったばかりである。

本書は、第一部「貴船の神々と神話」、第二部「古代中世の神話文学」、第三部「中世神話『貴船の本地』論」で構成されているが、右にあげたのは、第三部の第六章「中世神話『貴船の本地』と貴船神社」の末尾の文章である。次章は補論

が載っている。右の言は、実質上本書の締め括りとみてもよい。しかも、新稿であることから、著者の現在の立脚点でもあると思われる。確かに本書は、サブタイトルにもあるように、貴船神社研究序説であり貴船神社に関するはじめての注釈的研究だろう。貴船神社にとっては、自社の由来を語ってくれる大きな研究成果を得たことになる。「貴船神社研究」といえば三浦俊介、三浦俊介といえば「貴船神社研究」と目されるところなら、喜ばしい限りに違いない。

だが、評者は思う。本書は著者のこれまでの研究の集大成などでは決してなく、むしろ長年の知的彷徨の末によくやく手に入れた研究の出発点なのだ……。著者は、多くの資料や研究の方法論、学説に翻弄されながら、どうやら揺らいでばかりでもない独自の視座らしきものを見出したのではないか。研究の山に登る、納得できる入口を見つけたのかもしれない。第一部の第一章「神社神話の遡源」、第二章「神社神話の降臨」で記述される遡源神話、降臨神話の丁寧な分析は、著者自身が「船着き場」を求めて遡源（流浪）していく姿とダブってくるのがとても興味深い。そして著者は、「中世神話『貴船の本地』の研究はまだ始まったばかりである」という以外にない地点、つまりスタートラインに立つことができたわけである。したがって、研究書としての完成度の高さのみを評価されるのは、本書にとって必ずしも荣誉ではあるまい。スタートラインだけに、今後取り組まねばならない課題が山積しているはずである。このような研究書は、今後の著者が山積した課題を一つひとつ解決する度に、あらためて出発点としての価値を発見されていくものだと思う。新たな研究成果を出すに依りて振り返られながら、価値を高めていくのが望ましい。ならば評者としては、更なる研究を積み重ねる著者の背中を押すような評をしたところなのだが、主に近世の国学思想をやって来た評者は、中世や神話・伝承文学という問題であまり苦労したことがない門外漢だ。申し訳ないが、感想めいたことを呟くことしかできない。もっとも、冒頭にあげた文章を読めば、当面の大きな課題の一つはすぐわかる。著者には、舌氏存在を浮上させようとする目論見があるようだ。カモ一族

に管理され不利な状況に置かれていた中世・近世の舌氏。彼らが己の一派の存在を正当化すべく社内極秘情報を救い上げて作り上げた「貴船縁起」なる呪的テクスト、それが洛北周辺の法師陰陽師、唱門師たちの「貴船の神と（本地仏と）鬼の物語」として近世社会の中に広まっていく。そして、戦国の社会が遠のき近世の管理社会に変質していくにつれて登場する洛中の作者が「貴船の物語」を作成する……。著者がこのような見通しの下に貴船神社の伝承を研究するのであれば、今後の著者は、近世という時代に大きく踏み込んで問題を考えざるを得なくなることは明らかだろう。実際、著者は「はじめに」で次のような狙いを述べているのである。

今回、これら民間神話・仏教神話に対抗して「神社神話」という言葉を作ってみた。新造語「神社神話」は、神社の神職もしくは神社・聖地周辺の奉斎者（例えば貴船神社における舌氏一族）が神話を感得・創作・収集・編集して新たな神話を管理喧伝する時代があったと考えて設定したものである。折しも近年、江戸時代に神社の布教勧進のために作成された「略縁起」の調査研究が進み、無数の神社の創建もしくは中興の由来譚が公刊された。記紀・風土記でもなく、中世の神道説話・本地物語でもない、第三の「近世の神話」が浮かび上がってきた。この大きな神話世界の中に貴船神社の神話を位置づけるのが、第一・二章の役割である。

新しい地平を開こうとする著者の息吹を感じることが出来る。「神社神話」というタームをあえて作ることで、従来の民間神話・仏教神話といった範疇を突き破り、近世の「略縁起」の世界とも通底する次元を見通す。そしてそれを、記紀や風土記、中世の神道説話・本地物語とも異なった「近世の神話」として見出すとするのである。こうした著者の視座に、目下「近世神話」という方法概念で以て江戸時代の国学的言説を捉え直そうとしている評者は共感を覚えた。ようこそ、「近世神話」の世界へ！。ここに、神社・聖地周辺の奉斎者として新たな神話を創造し神話テクスト（呪的テクスト）を編集する舌氏がかかわってくるわけ

である。第一章「神社神話の遡源」、第二章「神社神話の降臨」において、著者は貴船神社の神話を「近世神話」にまで広げる射程に位置づけたい旨述べているが、第一章で次のようにいう。

売布神社の神話ように、海辺から遡上してきた神が聖地を次々と見出しつつ、最終的に上流の聖地に鎮座するという神話が日本各地で伝承されている。（中略）清らかな流れの源、水源地を求めて遡上する神の行く手には終着点がある。聖地を見出して長旅を終え、定住・鎮座する時、神が乗って来た船は不要となり、鎮座地の近くに伏せて置いておかれることになる。神々が天界から降臨する神話の場合も、飛翔する船（天磐船など）が鎮座後に安置・放置・廃棄され、多くの場合、岩や山になったと伝えられている。時に「磐船」「石舟」「舟形石」などの名が付けられ、あるいは特に名はなくとも目に見える証拠物として、その由来譚が語り継がれる場合が多い。

そもそも「近世神話」という方法概念を掲げる評者は、「神話」概念を拡大して考える。すなわち、「神話」とは単に太古の神々の物語というにとどまらず、各時代時代の要請するアイデンティティ存在の根拠を発見・創造していく知の運動体だと捉える。己の生きる時代状況、己を取り巻く空間の意味を問い直したりそれを越えるべく創造されるもので、それは己の存在の「起源」を求め創るという営為を伴う。したがって、古代は古代の、中世は中世の、近世は近世の、近代は近代の、現代は現代の「神話」があるということである。江戸時代での話であれば、とりあえずは「近世神話」と呼んでおこうということなのだ。

その「近世神話」では、著者の右の言に即していうと、眼前にある証拠物が重要な役割を果たす場合が多い。近世では、そこが「古へ」への入り口となる。トポスといってもよい。眼前の岩や山から「起源」を求める神話の創造が始まる。「磐船」「石舟」「舟形石」などの名が付けられるとは、間違いなくそういうことだ。ところで著者は、「貴船神社において遡源神話が成立した歴史的背景を把握することが重要」と述べるが、これは的を射た指摘である。遡源神話や降臨神

話を求めるということが、眼前の景物や状況の「起源」を求める営為であると同時に、それが現状への相対化・危機意識を契機としていることを物語っていると思われるからだ。たとえ、由来に触れていたとしても、現状への違和感に突き動かされなければ創造的な「近世神話」は生まれない。どこにそのような意識が存するかを捉えるためには、「遡源神話の成立した歴史的背景」の把握が必要となつてこよう。

そうした文脈で、著者が「古文書が失われている以上、貴船神社は自らのアイデンティティを社内の口頭伝承に頼らざるを得なかった。江戸時代にまずは『貴布禰社人舌氏伝来之秘書』や『舌氏秘記』『貴布禰双紙』などの内部資料が整えられ、その他に中世の日記・小記録などを参照して『貴船社秘書』という秘伝書が作成された」と述べている点を、評者は重視したい。カモ氏の支配に危機意識を募らせつつ貴船神社の伝承を支える舌氏存在が浮かび上がってくるからである。第二章「神社神話の降臨」でも、著者はいう。

（自ら仮想した貴船神社史として＝評者注）「舌」を名乗っていた一族は、その後、強大なカモ族が祀る賀茂別雷神社との確執の中で、自らの存在意義を高めるためにも、神社神話を荘厳昇華させる必要があつた。そのためにおそらく氏族内で伝承されていたであろう「白鬚遡源神話」を基に、賀茂別雷神社の遡源神話などを援用して「貴船遡源神話」を作り出した。その一方で、「貴布禰大明神」の降臨神話をも整備していったものと思われる。

神話を創造する舌氏存在を鮮明にしている。「神社神話」は、そのための重要なタームだ。さらに著者は、これら舌氏による改作が、第一章の「波母山遡源神話」を改作した「日吉大宮遡源神話」とともに、その成立が江戸時代であり近世の神社神話だという点に留意を促している。いわば、「近世神話」として扱ふべきではないかという問いを発しているのである。注などをみると、著者は近世の寺社略縁起なども視野に収めているから、確かに「近世神話」への模索が始まっているとみてよさそうだ。

系譜を有力氏族に仮託したり偽造したりするのは、「近世神話」を生み出す土壌を為すもので、周知のように、近世においては多くの系図や縁起が作成された。これらを、実証に堪えない荒唐無稽と一蹴せず己の一族の存在意義を主張するための「起源」の創造という観点から捉え直してみよう、というのが「近世神話」の狙いの一つである。貞治三年（一三六七）忌部正通著の識語をもつ『神代紀口訣』が偽書であることは早くから指摘されていたが、どうやらこれも一七世紀になって急に出て来た忌部神道という流派の起源作りと関係しているらしい。伊勢神宮別宮の伊雑宮の神職が自社こそ日の神を祭る社と主張して神道家永野采女、黄檗僧潮音とともに処罰・発禁処分となつた『先代旧辞本紀大成経』。しかしこれとて、広く読まれ続け垂加神道なども影響を受けたという。神代文字で歌の起源を語ろうとする小笠原流の『秀真政伝紀』等、枚挙にいとまがない。仮託や偽造を徹底して排しているはずの国学者の復古思想も、この土壌に根差す視点から捉えると、新たな読みが可能となるのである。例えば本居宣長『排蘆小船』が神代から歌の起源・歴史を滔々と述べるのは、堂上歌壇からの疎外感をバネに、当世歌人としての己の存在意義を確認するための「起源」探求であることが明らかになってくる。「近世神話」の具体的展開はまだまだこれから発掘していかなければならないが、「神社神話」を追究するスタンスの著者の今後の仕事は、近世における起源神話の創造という問題とも次第にかかわりを深めていくに違いない。

第三部「中世神話『貴船の本地』」第六章「中世神話『貴船の本地』と貴船神社」で示される「貴船神社のスサノヲ祭祀の謎」も興味深く読んだ。みてみると、これも新稿。著者は、貴船神社所蔵の「貴船社秘書」に縁結びの神スサノヲに関する記述がみえることに注目し、「貴船神社の神職の間では、「私市社」「林田社」の両社が江戸時代に入ってから上賀茂の社家によって創建されたと言ひ伝えられている。これらのことから、社祀に変遷はあるものの、中宮の地に出雲系の神々が集中的に祭祀されてきた状況が見えてくる」と言っている。貴船神社に

おいては、賀茂神社の撰社になっていくという状況の中で、懸命に己の存在を主張しようと「黄船社秘書」や「舌氏秘記」を著す舌氏。祭神名にしてから、著者は「黄船社秘書」の記す九柱の神々と現在の貴船神社の祭神とはほとんど一致しないという。著者はここに、秘められた九柱の祭神の祭祀の存在を推測する。この過程でスサノヲ等出雲系の神々が割り込んでくるわけだが、文脈がいささか整わず、評者としてどこにワクワクしてよいのか、焦点が絞りにくい。このあたりをすっきりと叙述できる視座に立つことが、今後の著者の課題となるのではない。評者としても、近世期において寺院や神社がそれなりに整備されていく中で、如何にして己の氏族としてのアイデンティティを確保するか、そのためにどのような神話を創造していくのか。近世における出雲神話の広がりがここに絡んでくるとしたら、実に興味深い事柄である。

但し、留意してほしいことがある。「近世神話」とは、実態概念ではなく方法概念だということだ。近世の神道的な現象に安易に還元してはならず、神道に関する書だけを扱っていればよいというものでもない。「近世神話」は、儒教、仏教、民間宗教においても、和歌、物語等においても、新たな次元を切り開くべく「起源」を創造する知の運動体そのものを総称する概念である。既成の研究史のジャンルを越えたところに見出される知の運動体である。「近世神話」という視座を取ることによって、これまでみてこなかった相やジャンルの絡み合いが明らかになったり、相互に無関係と思われる要素が共振したりするあり様に気づかされたりする。名高いテキストでも、今までは大きく違う読みがなされるかもしれない。同時に評者は、「中世神話」もやはり方法概念であることに思い至らざるを得ない。その意味で、本書が「中世神話『貴船神社』論」「中世神話『貴船の本地』と貴船神社」といった部や章のタイトルを記すのをみたとき、そこに方法概念への自覚もなしに安易に既成の「中世神話」に依拠しているスタンスが感じられて、賛同できない。もつとも、貴船神社神話を論じた以外の第Ⅱ部「古代中世の神話文学」を読むと、これまで分類中心で進めてきた説話・伝承研究か

ら、誠実に新たな潮流をなしているかにみえる「中世神話」の世界に接近してきた、というべきかもしれない。特に、新稿ではない第Ⅱ部第二章「中世神話と和歌・注釈書」は好論。藤原(九条)兼実の次男良経が『春日社歌合』三二番の「天の戸をおし明がたの雲間より神代の月の影ぞ残れる」の歌を論ずるが、著者はここに記紀の天岩戸及び天孫降臨神話を素材に当時の天皇家と藤原氏の関係を正當化する起源神話の創造を看取し、これを「隠された主題」とみている。その際、「神世において天照大神が天岩戸あまのいわとを押し開けて出てくる時の輝かしい光景とが二重写しになって見えるという構成になっている」一点に注目し、本歌(『新古今集』巻一四・恋四・二二六)一番読人しらず「あまのとおしあけがたの月みればうき人しもぞこひしかりける」を生かしながら神祇色の濃い歌を作り神話イメージを積極的に出す良経に言及する。このあたりの叙述には、和歌研究でも試行錯誤を続けた著者の渋さ・年輪が感じられて、興味深い。そして、次のようにまとめるのである。

本章は当初、良経の「天の戸を」歌が『古事記』『日本書紀』に代表される古代神話を本説とした和歌だということを、自讃歌注を通して解説しようとする目論んだものであった。しかし、近年の中世神話研究の進展の中で、天照大神と天児屋根尊との二神がやがて末世になることを予見して君臣の固い紐帯を約束したという中世神話があることを知るに及び、良経の叔父である慈円の『愚管抄』での記述や「君を守る」歌との親近性から言っても、良経「天の戸を」歌自体が「二神約諾」を前提としていると考えざるをえなくなつた。

「中世神話」に接近した著者の経緯が、正直に語られている。誠実に「中世神話」に接近する著者のスタンスは、評者も理解できるところである。にもかかわらず、今後の著者に訴えたい。既成の「中世神話」論に依りかかるのではなく、むしろ己の視座からその方法概念としての意味を、そして神話を創造するとはどういうことかを不断に問い続けてほしいと。その営為が、おのずと「近世神話」

を呼び寄せるに違いない。このあたりを今後の著者がどうクリアするか、評者にとっても決して他人事とは思えない。

そう考えると、著者が呪的テクストを創り上げる舌氏を浮かび上がらせつつも、冒頭のように「とは言え、神社付属の下層民であつたはずの舌氏にどれほどの教養があつたのか、その他、各段落での実態すべてについても大いに疑問の残るところである」と述べているのにも、陥りやすい傾向として警鐘をならしたくなる。舌氏の歴史の実態を能う限り究明することは必要である。しかし、方法概念「近世神話」でみる舌氏は、あくまでテクストからみえてくる、テクストを創造的に読む中で見出される氏族のはずである。安易に歴史の実態に還元するのは戒めるべきだ。むしろ、歴史の実態に還元して納得したがる文献中心の傾向に対

し、「神話文学」の本質からの力強い方法的宣言が求められるのではないか。

いつのまにか、評者自身への叱咤となつてしまつたが、今後の著者と問題を共有できることを心から望んでいる。最後に、第Ⅱ部第一章「記紀神話の構成―神話対照表を読む―」で、自分独自の記紀神話対照表を作成して論を進める著者の姿勢に、親近感を抱いたことも付け加えておきたい。地味ではあるが自家製の道具にこだわる姿勢は、如何にも三浦俊介らしいから。

（三浦俊介『神話文学の展開―貴船神社研究序説』思文閣出版、二〇一九年六月刊、A5版、四五六頁、本体価格二二〇〇〇円）

（金沢学院大学名誉教授）